「蜻蛉日記」鳴滝参籠をめぐって

――特に成立プロセスに関連して――

守屋省吾

実録的文芸作品において、執筆プロセスが一見して一括回想と認定される作品はともかく、時間的間隔を置き何回かの執筆によって成立したと推測され、加えて記述期間が長期にわたる作品にあっては、執筆意図、文芸意識、文芸構造を考える上で、執筆成立プロセスを考え合わせることの重要性を感ずる。

蜻蛉日記の場合、記述された期間が二十一年の長きにわたり、二十一年の記述が上中下三巻に分割され量的には三巻それぞれ大同小異とはいいながら、記述された期間は十五年、三年、三年と均等に分割されてはおらず、記述内容も各巻特異であり、質的にはかなりの複雑さを内包している。二十一年間の記述全体が一括回想の執筆であるのか、あるいは分割して執筆成立したものか見解はまちまちでいまだ定説となる論定は見られない。また三巻に構成されている記述が作者自身の構想によるかどうかも問題であり、仮に二十一年にわたる記述が分割成立したものであるとするならば、執筆の時点も当然時間的な間隔があることが考えられ、何箇に分割されて執筆成したかはともかくとして、それぞれの部分を執筆する折の作者の文芸意識は時間の経過と相俟って微妙な違いも生ずるであろうし、文芸意識の違いは構想にも影響を与え、さらには記述面にも現象的な変化となって現われることは十分考えられる。一方、あくまで作者晩年に至っての己が半生を回顧しての一括回想記述であるとするならば、執筆は擱筆の年天延二年後であって、執筆にいかほどの時間が費されたかは知らないが、仮にかなりの時間をかけての執筆であったとしても、作者の意識は一定していたであろうし、一貫した構想のもとに執筆されたであろうから、成立過程における複雑さは顕現しないと思われる。しかし執筆が一括した回想記述ではなく、分割して執筆成立したものとするならば、作者の文芸意識、構想、作品の形成過程は複雑多彩を極めることになる。

筆者はかって上巻のみ個別的に執筆成立したものと考え、拙稿[註一]を公にし、また中下巻の成立プロセスに関して口頭発表[註二]をしたのであるが、これらを踏まえて以下三巻全体の執筆成立の跡を追ってみたい。

一

中巻天禄二年六月、作者はほぼ二十日間の鳴滝参籠を行なってい

るが、この鳴滝参籠は作者の意識の転換の契機、ひいては作品の形成過程においても重要な要素を持っているようである。鳴滝参籠と相前後しての唐崎、石山、初瀬参詣が現実からの一時的逃避であったとはいいながら、いわば慣例的であったのに対し、鳴滝参籠を思いたち実行に踏み切ったことに作者の急迫した心理を筆者は読み取るのである。

鳴滝参籠に発つ日、折しも兼家の物忌もあける日とて、作者は急ぎ準備をするのであるが、兼家の常備薬をふと見い出し、これにかこつけるごとき恰好で

さむしろのしたまつこともたゑぬればをかむかただになきぞかなしき　　中略

「身をしかへねば」とぞいふめれど、前わたりせさせ給はぬ世界もやあるとて、今日なん。これもあやしきとはずがたりにこそなりにけれ

と参籠を契機に出家遁世の志を暗示した消息を道綱に託し、「もしとはるるやうもあらば、『これはかきおきてはやく物しぬ。おひてなんまかるべき』とをものせよ」との口上までも教えて送り出している。作者の消息を見た兼家は早速に

よろづことわりにはあれど、まづいくらんはいづくぞ。このごろはおこなひにもびんなからんを、こたみばかり、いふことをきくと思ひて、とまれ。いひあわすべきこともあれば。ただいまわたるとの、あわてふためいた口吻の返事をよこしている。この返事は道綱が折返し持参したものであろうが、これを見た作者は急遽参籠へと旅立つのである。ここで注意しなければならないのは作者の消息を見た兼家のあわてぶりである。これまでの日記記述には具体的に表われてはいないといいながら、兼家に対しては直接にも消息においても出家遁世せんといわんばかりの姿勢は多く示していたことであろう。かかる折、単なる怨言として兼家は受け流していたのであろうが、この折にのみあわてふためいた反応を示したことは、それなりの理由がある。天禄二年二月中頃、作者は山寺参籠のため長精進を始めようとするが、周囲の者から秋こそ長精進に適しており、いまはその期でないと忠告されたこともあり、近い縁者の中に産婦があり出産の手助けも必要ということで思いとどまり、実際に始めたのは四月早々父倫寧邸においてであった。終了したのが五月も五日を過ぎた頃。この間兼家の来訪は勿論、消息さえあったとは記述されていないが、一箇月以上にも及ぶ間、なにもなかったとは思えず、記述しなかったのかも知れない。ともあれ兼家は作者の長精進は承知していたと思われる。作者のこのものしい長精進と、参籠出立の日の出家遁世をにおわした消息との関連性は兼家をあわてさせるに十分なものがあったのである。参籠当日、作者は兼家の反応をみて急ぎ出発するが、兼家に書き送った手紙のごとく真に出家遁世の契機としての参籠であらば、第一あてつけがましく兼家にそれらしい口吻を漏らすこともなかろうし、一箇月以上の精進期間に確固たる決意ができている筈でもある。それをしもあまりに急ぎ出発したということは、見せかけ的な出家遁世の姿であり、思わせぶりな参籠ではなかったろうか。このことは参籠中の記述に一層顕著に現われている。参籠当夜、御堂に参上するべく沐浴を営んでいる折、里方の侍女より作者が鳴滝へ出立後、兼家が留守宅に訪ず

れ、ことの由を聞いて帰った故、必ずや鳴滝にも出向くであろう旨の消息がくるが、これに対する作者の心中思惟

うたて、心おさなくおどろおどろしげにやもしないつらん、いと物しくもあるかな。

けがれなどせばあすあさてなどもいでなむとするものを（傍点筆者）

のごとく、月の障りも近々あることを予測していたことであり、穢の身をもって聖域に滞在することは忌避すべく、真に遁世の意あるならば、これを過ごしてから参籠に入るのが順当かと思われる。これとても作者の出家遁世の姿勢が見せかけ的なポーズに過ぎないと推断する証拠となっている。その後、初夜の勤行が始まろうという時、里方の侍女のことば通り、兼家は物忌中の身でありながら、急ぎ鳴滝に馳せつける。道綱を介しての兼家の懐柔を作者はかたくなな態度であしらいはするものの、本心からの態度ではなかった。それというのも、参籠第二日、道綱に託した兼家への消息において

いとあやしう、おどろおどろしかりし御ありきの、夜もやふけぬらんと思ひ給へしかば、ただ仏を『をくりきこえさせ給へ』とのみ、いのりきこえさせつる。さてもいかにおぼしたることありてかはと思ふ給へれば、いまはあまえいたくて、まかりかへりらんこともかたかるべき心ちしける（傍点筆者）

と、参籠前六月一日の兼家への消息、参籠当日里方にて道綱に持たせやった消息、兼家鳴滝に馳せつけた折の作者の口吻などと比較すると、あまりにも軟化した態度である。この消息につけて松蘿のついた松の枝を贈るが、松蘿は深山の象徴でもあり、寿をも表わすという。勿論作者は深山の象徴の意のみをこめて贈ったのであろうが、寿の意あることを知らない筈はない。ただその折に気がつかなかったのであろう。仮に気がついていたとしたら、現実回避を志向しての参籠はなんら寿ぐ理由はなく、反対に最も悲しむべき状態であらねばならぬ。ここらあたり作者の言動の齟齬が目立ち、参籠が真に出家遁世を志向するものでなかったことを物語っている。

参籠第一夜を契機として作者の兼家に対する態度はあまりにも軟化するのであるが、その最大の要因は、兼家物忌中でありながら、急遽作者のもとに馳せ参じたことによると思われる。夫として一妻妾が出家遁世を志向して、深山の寺に参籠したとあらば、儀礼的にまれ、参籠先を訪い形式的にもせよ慰留するぐらいのことは当然のこと、しかし作者にとって兼家の来訪は極めて意味深いものがあったのである。これは鳴滝参籠を思い立たせるに至った根源的な要因からみてゆく必要がある。

二

天禄元年五月十八日、兼家の伯父小野宮太政大臣実頼の薨去により、兼家は実頼の召人近江と関係を結び、またこれと相前後して村上帝女三宮にも通じ、特に近江に対する執心は強く、綿々と通いは続いたものと思われる。それがため作者は石山に逃れてはみるものの、一時的逃避にすぎず精神的には愈々追いつめられて行く。近江にあれ、女三宮にあれ、作者を苦しめた兼家の漁色はこれらが初めてではなく、つとに町小路女との関係は作者をして大層な苦渋を味あわせている。しかしその当時にあっては作者はまだ若く、己が美

貌についても相当な矜恃は持っており、兼家の心を繋ぐだけの自信は十分にあったであろう。だが天禄元年ともなると結婚生活は十七年にも及び、作者三十も半ばに達しようとの時期、昔日のごとき自負によりかかっているにはあまりにもさだすぎた女になってしまったことを承知していた筈である。明けて天禄二年、従来元日に姿を見せないことのなかった兼家はこの年に限ぎって姿を見せず、ようやく一月八日のほどに顔を見せ、その後六月四日の鳴滝参籠までの間、二月二十四日の形式的な消息、三月末倫寧邸に作者を訪問、六月一日消息といった具合で、日記本文をそのまま信ずるならば、兼家の離反はかって見られない程顕著なものがある。作者のもとを訪れないままに、兼家は近江に通い続けるのであるが、時には作者の邸前を素通りする兼家の車の音を耳にし、周囲の者からは兼家に関する風聞を聞かされつつ、兼家の妻妾としての自分がいかに形ばかりのものであり、このままの状態が続く限り完全に兼家から離反されるであろうとの見通しを持ったに相違ない。かって町小路女に対しては誇り高い女のたしなみを忘れたごとく痛烈な非難と嫉妬の情を披瀝したのであるが、近江に対しては非難がましい言辞をもって表現しているところは全くといっていいほどになく、兼家に対する怨言のみに集中している観がある。町小路女に対しては、正規な妻妾としての優位性、兼家の愛を繋ぎとめておくことができるとの自負があってこそ痛烈な非難もし、嫉妬の情も起り得る。近江に対しては烈しい言辞を呈していないということは、兼家の妻妾としての意識すら稀薄になり、嫉妬の情念さえ湧きあがってこない切迫した心理状態に追い込まれていたと思われるのである。年令もすでに三十も半ば、一般的には夫の処遇がいかなるものであっても、諦観にも似たある種の精神的安定期に入る頃である。作者自身かかることは承知していても、今の今、兼家の来訪はあまりに間遠く、なんとか兼家の妻妾としての確たる証拠をいかなる形にあれ把握せんことには精神的安定を得るすべとてなく、どうにもならないところまで追いつめられた自分を見い出すだけであったろう。かかる情況のもとに、天禄二年二月、長精進をまず出家遁世へのポーズをとる布石として思いたち、具体的な契機として鳴滝参籠によって兼家の反応を試み、反応の如何によって真に遁世も辞さない思いではなかったかと思われる。結果はどうであったか。参籠出立の当日、作者の消息に対する兼家の返事に現われた驚愕の口吻、懸命に慰留せんとした言辞、参籠当夜物忌にもかかわらず鳴滝まで出向いて慰留せんとした態度等、近江、女三宮との関係が生じて以来ほぼ一年もの間、枯れに枯れた兼家の言動とは思えないほど誠意ある態度である。作者の見せかけ的なポーズによって試みた兼家の反応は少なくとも作者が兼家の心中に妻妾として位置していることを認知するに十分なものがあったと言っていい。

思うに、兼家にとって作者の存在は町小路女、兼忠女、近江、女三宮等を愛慾の対象として見たのとは全く異質な、いわば観念的なものであったようだ。上述の女性たちが如何なるタイプの女であったかは知らないが、兼家との関係は行ずり的な交渉であったと思われるのに対し（近江の場合後に一妻妾としての座を占めるに至るが結果的な現象とみていい）、作者の場合、兼家と結ばれる事情が当時の慣習と相違して、父倫寧を直接経由するという破格なものであ

ったが、それだけに兼家としては作者との結婚を誠意望むところであり、世間でも正規な妻妾として認めたことは勿論のこと、兼家個人としてもその出自が受領階層とはいえ、つとに歌人としての名声を博し、なみなみならぬ美貌、高いプライド、当時の女性にはあるまじき個性を持った作者を安易に意識する筈はない。それは時間の経過に従い多少の変遷はあったであろうが、終生兼家の意識に存在したに違いない。ただ作者は兼家にとって愛らしい女ではなかった。兼家との交渉で常に顔を出すのは矜持であり、強烈な個性であり、当時の結婚慣習の中に生きる男性としての兼家が、作者のごとき女性を愛慾の対象として処遇せず、より没我的な女性に移り行くことは当然のこと、しかし兼家がより没我的な女性町小路女らに愛慾の対象を求めたとはいいながら、作者を没却したわけではない。兼家の心中には常に作者を正規な妻妾として意識されていたのであり、この意識は四六時中作者のもとに訪れ交渉を持たねばならぬという性質のものではなく、上述のごとく観念的なものであったと思われる。

三

天禄二年六月四日、兼家の言動は作者の急迫した心境を氷解させる契機となって、翌参籠第二日の兼家への消息に現われたごとく怨恨も軟化したものになったと思われるが、上述のごとき兼家が作者を処遇する意識をすべて理解できたというのではなく、鳴滝でつれづれと自照しつつ日々を送るうちに漸次理解され、鳴滝より下山後、さしたる時をおかずに行なわれた初瀬参詣における自然観照のうちにより明確なものになっていったものと思われる。

ところで鳴滝参籠中の作者の心境の変遷の跡をもう暫く追ってみたい。参籠当夜、兼家の心中に妻妾として占める位置が小さくないことを知った以上、見せかけ的なポーズとしての参籠を継続する意味は半減したと思われる。前にも掲げた参籠第二日目の兼家への消息「いまはあまえいたくて、まかりかへらんこともかたかるべき心地しける」、これに続いての「むかしも御覧ぜしみちとはみ給へつつ、まかりいりしかど、たぐひなく思ひやりきこえさせし。いまいととくまかでぬべし」には暗々裡に兼家の迎えを要請しているようであり、この消息により兼家が作者の参籠の目的が那辺にあったか見逃す筈はない。日を経るに従って無聊がつのりつつ、木の立枯れに鳴く鶯の音にまで「人来人来」との擬声を聞くまでに兼家の迎えを待つ心境が現われている。予測したごとく時をおかず月の障りになるが、これを理由に京に帰ることもできない。京中ではすでに「みなかたちことにいひなしたるには、いとはしたなき心ちすべしと思ひ」と、出家遁世したとの風聞がもっぱら、作者の立場はひどく中途半端なものになり、縁者からのなにくれとない慰問を受けるのを仕事のようにして日を送っているに過ぎない。日を経ても兼家は迎えに顔を見せず、ようやく使者をよこすが、作者に言上することば、

かくてのみは、いかなる人かある。世の中にいふなるやうに、ともかくもかぎりになりておはせば、いふかひなくてもあるべし。かくて人もおはせざらんとき、かへりいでてゐたまへ覧も、おこにぞあらん。さりとも今ひとたびはおはしなん。それにさへいで

給はずば、いと人わらへにはなりはて給らん。

には、作者の鳴滝参籠を画策した意図が那辺にあるかを見通しているようであり、この使者、世の中を知り尽した老練な家司のようである。作者にしていかに無聊をかこちつつ日をすごしているとはいいながら、使者のことばに従っておいそれと下山することもできず、その反動として、「さや思ひなるとて、いださじと思ふなる人のいはするならん」と、時姫にまで疑心を抱くまでに至っている。

一方待てど現われない兼家に対しては、

人はなほすかしがてらに、さもいはるるにこそあらめ、かぎりなきはらをたてて、かかるところを見おきて、かへりにしままに、いかにともおとづれこず、いかにもいかにもなりなば、しるべくやはありけるなどおもへば、これよりふかくいるともとぞおぼえける

と、あたかも参籠を続行していることが、己が意志ではなく、兼家の責任でもあるかのごとき口吻であり、参籠に終止符をうつべく兼家の迎えを心待ちしている心境が吐露されている。また思案にくれるあまり、京近くの国に下向していた父倫寧のもとにまで、わざわざ消息し如何なる態度をとるべきか意見を求めている。かかる作者の窮地に追いつめられた頃ほいを見計らった如く、鳴滝参籠のはては劇的ともいうべき兼家の狂態のなかで作者は下山することになるのだが、この兼家の狂態は、京中では作者の参籠は当然出家遁世に直結するものであろうとの見方をしており、そんな世人の目前を作者一人下山するのはいかにも愚かしく人笑いになること必定、この作者の窮状を慮って強引に下山させたごとき形にせんとした兼家の深い配慮から演出されたものではなかったか。ここらあたり兼家の老成ぶりを目のあたりに見る思いがする。本文記述の有無はともあれ、作者とて兼家の配慮を思わない筈はない。

かくして作者は鳴滝参籠を通して、夫兼家の態度から妻妾としての立場を再認識できたのであるが、兼家の妻妾として、しかも妻妾たることを再認識しなければならなかったところに彼女の悲劇性を感じずにはいられない。

四

上述のごとく鳴滝参籠、それに続いての初瀬参詣を契機として、作者の意識の大転換があったのだが、このことを念頭におき改めて蜻蛉日記全巻を眺めると、成立過程、構成上で考えさせられることが多い。意識の転換、それはとりもなおさず兼家に対する情念の変化でもあり、ひいては兼家との結婚生活観の変貌でもあるのだが、かかる転換があった以上「かげろふのごとき身の上」を書き日記するという意図は皆消しないまでも、かなり減少したであろうと思われる。このことは本文記述にも現われている。すなわち天禄二年七月初瀬参詣に関しての記述後、八月以降年末までの間の記述の粗笨さは、密度の高い中巻の記述の中では異色であり、さらに下巻の巨視的傾向として「かげろふの如き身の上」を書く意図には直接に関係のない記事が主となっており、一見主題を喪失したかの観があり、これら記述面の具体的な変化は作者の意識上の転換を原因としていることは疑えない。だとする蜻日記は作者の兼家に対する意識ということからは、天禄二年七・八月を境として二分されることに

なり、成立過程についてもこれを視点に考えるべきかと思う。

上巻の形成については、考察の視点は違うものの、上巻のみ個別的に執筆されたものとして、実際の執筆時が記述の粗笨さが際立っている安和二年前半期にあったのではないかと推断したのだが[註三]、上村悦子博士から口頭にて、日付け記述、記述内容の粗笨であること自体、作者と兼家との関係において記述素材となるものがなく比較的幸福な時期ではなかったかとの御示唆をいただき、また抜刷の玉稿[註四]をもいただき、爾来蜻蛉日記の構成、成立プロセスにつき再考することになった。上村博士は上記の玉稿において構成・表現の面から上巻の特質を考察され、道綱母の結婚生活は日記記述とは裏腹な幸福なものであったことを強調され、比較的幸福であった生活にいかにも物はかなげなベールをかけて再構成して執筆せんとした動機を、東三条第が完成したにもかかわらず、これに迎え入れられなかったこと、小野宮藤原実頼の召人近江に対する兼家の懸想の二点を挙げられ、執筆に着手した時期を鳴滝参籠より下山した頃と御推断なされている。誠に御達見といわざるを得ず、筆者は多くを考えさせられたのだが、すでに考えたごとく鳴滝参籠、続いての初瀬参詣を契機として作者の対兼家観、結婚観、生活観に転換があったとすると、一妻妾として実際には幸福であったことはともかくとして、「かげろふのごとき身の上」と自分を思うこと自体大きく後退したと思われ、「思ふやうにもあらぬ身」を記述する意図は鳴滝参籠、初瀬参詣を分岐点として前後それぞれにかなり異質なものになっていったと思われる。

上巻及び中巻天禄二年前半期までの事情につきもう少しく考えてみたい。上巻の成立についてはやはり個別的な執筆成立であるとの筆者の考えは変わらない。確かに本文記述からも作者が妻妾として恵まれた処遇を受けたということはわかる。しかしそれは本日記を読む者、第三者としての客観的な判断であって、これをもって道綱母自身もそう感じとっていたであろうとは早断できないであろう。彼女の誇り高い矜恃、強烈な自我、鋭敏な感受性からすれば、兼家との結婚生活において、招婿婚の風習下の平均値的幸福感に満足し得ず、あくなき独占欲をもって兼家を自分に結びつけようとし、それが不可能とあらば悶々として自虐とも思われるほど己れを苦しめる。そんな超時代的な〝女〟を上巻の中に見てはいけないのであろうか。蜻蛉日記ほどの大作を書き得た作者が執筆にあたって文芸的操作を全く弄さなかったとは思えない。しかし上巻に表わされた「思ふやうにもあらぬ身の上」は作者の実感に近いものではなかったかと思われる。結婚生活十五年の間、作者の心を温める兼家の処遇はいくらもあったであろうが、それは常に断片的なものに過ぎず、完全な結婚、理想的な結婚を願う作者の主観的体験からすれば、心満されざるもののみ蓄積され、これという具体的な筆を執らせるに至った契機を挙げずとも、十五年間は優に「思ふやうにもあらぬ身の上」であったのではなかろうか。結婚生活十五年は回顧し反省するには恰好な時間のまとまりでもあり、執筆のための資料を整理しつつ安和二年前半期までに上巻を書きあげたのであろう。安和二年前半期の記述の粗笨さにつき、「かげろうのごとき身の上」を書くには比較的幸福な時期であり、しかるべき記述素材がなかったかも知れないが、作者の主観性に思いを至すならば、ここに上巻の執筆が

あったと推定せざるを得ない。それになによりも重要なことは上巻がまとまりのあるものとして執筆されたことを物語る序跋のあることをも合わせ考えるべきである。

上巻十五年の記述はあくまで一まとまりの記録として書きあげんとしたもので、作者はそれに継続して続編を執筆せんとの確乎たる意図は多分なかったであろう。だが実際に上巻を執筆し終えたところでは日々の生活はなんの変わるものではなく、相も変わらず「思ふやうにもあらぬ」生活の連続、それを思うにつけても上巻十五年間の記述に続いてさらに身の上を書き日記せんとの意図を持つに至ったのであろう。しかも兼家は実頼薨去により自由の身となった近江、女三宮に触手を伸ばし作者への足枯れは未曽有、上巻十五年間を回顧しての「思ふやうにもあらぬ身」についての嘆息はより切実な実感として証明されたごとき結果になり、その衝撃はさぞや大きかったことであろう。かくして長精進、鳴滝参籠へと一連の身を賭した試行となっていったのである。

しからば中巻は如何にして形成したのであろうか。上巻が十五年間を一括回想記述したのに対し、中巻はつとに執筆意図があったのであり、上巻を執筆することによって養われた己が身の上を書き日記するという行為は一段と充実し、その日その日の体験は執筆意図のもとにはっきりと記憶され、ある期間ごとにメモされ実際の執筆時にこれら原資料を一括補筆し綴合したものと思われる。その時期は鳴滝参籠、初瀬参詣が終了した天禄二年八月から十二月までの間、それも年末に近い頃であったと思われる。原資料をまとめて補筆綴合した時期はすでに兼家に対する意識転換はあったのであるが、執筆意向のもとに書き継がれた原資料はそのままの形で生かされ、反対に意識の転換の後天禄二年八月以降年末までの記述は鳴滝参籠に至るまでの強い怨恨表現に適合させるべく、満たされざる心情を吐露するという文芸的操作を行なっているものと思われる。その上意識の転換は作者のものの見方は勿論のこと、兼家の言動についての感応も変化し、日記記述する意欲さえ減少した結果必然的に記事が粗笨にならざるを得なかったのであろう。

五

日記全巻の地の文中での兼家に対する敬意表現を摘出すると次のごとくである。

上巻

。「まだいをなどもくはず、こよひなんおはせば、もろともにとてある。いづら」などいひてものまゐらせたり。（康保三年一五一）

中巻

。くやしくなどおもふほどに、いへうつるとかせらるることありて、我は少しはなれたる所に……（安和二年、一七三）

。……いひて、かへられぬれば、つねはゆかぬこころも、あはれに……（天禄元年、一八七）

。内よりやがて、車のしりに陵王ものせて、まかでられたり。（天禄元年、一八八）

。上達部どものみな泣きうたがりつることなど、かへすがへすもなくなくかたらる。（天禄元年、一八八）

。あやしく、かかる世をもとひたまはぬは、このさるまじき御仲のたがひたれば……（天禄元年、一九六）
。「かしこに物してととのへん、さうずくしてこよ」とて、いでられぬ。（天禄元年、二〇八）
。かかるところを見をきて、かへりにしままに、いかにともをとづれられず。（天禄二年、全講本二七七）
。天下の散楽ごとをいひののしらるめれど、夢に物もいはれず……（天禄二年、二三八）
。又の日、今日をまたみんかしと思ふ心、こりずまなるに、夜ふけてみえられたり。（天禄二年、二四三）

下巻

。うるはしうひきさうぞき、ごぜんあまたひきつれ、おどろおどろしうおひちらしていでらる。（天禄三年、二五九）
。「いといみじきことかな、いまははふれうせにけんとこそみしか、かうなるまでおざりけることよ」とてうちなかれぬ。（天禄三年、二六七）
。単衣の袖あまたたびひきいでつつなかるれば、いとうちつけにも（天禄三年、二六七）
。「いまゐていなん、車よせば、ふとのれよ」とうちわらひて、いでられぬ。（天禄三年、二六八）
。「おなじうは、院へまゐらん」とて、ののしりていでられぬ。（天禄三年、二六九）
。あけぬれば、「車など異様ならん」とて、いそぎかへられぬ。（天禄三年、二六九）
。「さはがしうぞなりまさらん」とて、いそがれぬ。（天禄三年、二七五）
。「などかこぬ、とはぬ、あからしとて、うちもつみもし給へかし」といひつづけらるれば……（天禄三年、二八三）
。御文あるかへりごとの端に……（天延元年、二八八）
。「……」とあれば、いとをかしうて、の給へるもの、あるかぎりよみいれて、たてまつるを……（天延元年、二九〇）
。いま二三日許ありて、からうじて、みせたてまつりつ。（天延二年、三〇〇）
。ここには、御ゆるされあらんところより、さぞあらんときこそは、わびてもあべかめれ。（天延二年、三〇四）

（注）△（　）内の「全講本」は「全講蜻蛉日記」の本文による。
△（　）内の数字は岩波日本古典文学大系本の頁を示す。

以上の敬意表現は、記述が兼家に及んでいる箇所に対する比率は決して大きくはなく、兼家に対する叙述は圧倒的に通常表現がなされている。あたかも兼家に対しては通常表現を徹底せんとしたにもかかわらず、無意識裡に敬意表現がなされたかの観がある。上巻は一箇所のみ、中巻から下巻にかけて漸増している。中下巻での敬意表現の散見度は数値には開きはあるというものの、敬意表現がなされているという事実においてはその差は大同小異である。上巻の一箇所というのは、中下巻とは異質である。それというのも散見度の

違いは勿論のこと、敬意表現がなされたのが、兼家の大病に際しての特殊な状況下であって、折しも二人の愛の交歓が高まった時のこととて、後年一括回想して執筆する折、その時の心情が生々しく再起して無意識裡に表現されてしまったものであろう。

実録的文芸作品において、記述の対象となっている人物、就中作者と最も近しい関係にある者、とりもなおさず記述の中心人物であり、また執筆契機もこの人物との関係から生成する心理的反応が素因となっている場合、かかる人物を記述する態度に一方では敬意表現が認められず、他方散見度は少ないながら認められるということは、作者の執筆時における心理状態が不変でなく、変遷していったことを示すものであるに違いない。

ところで蜻蛉日記は、回想の対象となった期間の長短はともかくとして、回想記であることは間違いないであろう。だが全巻が一括回想として記述されたということになると話は別である。仮に全巻が一括回想記であるとするならば、実際の執筆期間がどれだけかかったかはともかく、一括回想するにはそうするなりの時点、いってみれば己が過ぎし来った半生を冷静に客観視できる心境に至って初めて可能になるというもの。己が半生を冷静に客観視できるということは、少なくとも精神的にも心理的にも落着した状態にあり、作品の主題と直結する人物についての叙述に敬意表現がなされなかったりすることはあり得るとも思えない。上巻の一箇所の敬意表現の特異性を考えると、中下巻の敬意表現と同一視できないところからして、上巻と中・下巻の連続性はないことになり、執筆プロセスにおいても上巻の成立は個別的なものであるとの根拠が生ずる。もっとも敬意表現ということでの上巻と中・下巻との違いを執筆プロセスに関係なしとして、作者の文芸的操作による脚色であると考えるなら特に問題視することはない。しかし、いかに作者が文芸的操作に熟達していたとしても、より大まかな構想を試みこそすれ、末梢的な叙述にも行き届いた脚色を浸透させたとも思えず、また上巻に敬意表現が皆無に近いということが蜻蛉日記の文芸作品としての構想上確たる意味があるならまだしも、さしたる意味も認められない。緻密な構想の現われの一端とみるよりは、兼家に対する感情、心理の変化が無意識のうちに叙述に表現されたものとみるべきであろう。このように考えてくると、上巻の執筆は鳴滝参籠、初瀬参詣を契機としての意識転換があった以前に執筆されたとの根拠が付加されることと思う。なお、地文中での兼家に対する敬意表現が統一的でないのと同様に、兼家以外の人物に記述が及んでいる場合も、敬意表現が不統一であるなら特に兼家に対する敬意表現のみをとりあげて云々することはないが、実際には他の人物に対する場合は極めて統一されている。例えば(イ)兼家との血縁関係にあり、道綱母と同世代以上の者（実頼、師氏、実方、伊尹、兼通、遠度、安子、登子、怼子、愛宮）、(ロ)皇室（村上、円融、章明親王、兼明、高明、為平親王、保子内親王、選子内親王）等には厳正に敬意表現をなし、(ハ)作者との血縁及びその縁戚者（倫寧、生母、理態、長能、為雅、為雅室）、(ニ)兼家の妻妾及びその関係者（時姫、兼忠女、兼忠、町小路女、近江）等には敬意表現はなく（両親については二、三散見されるが甚だ少なく特に問題視するにはあたらない）、作者の意識のほどもわかろうというもの。

次に中巻の執筆成立と鳴滝参籠、初瀬参詣及び兼家に対する敬意表現との関係を見たい。「思ふやうにもあらぬ身の上」を上巻に書き日記したことで文芸意識も高まり、書くという体験を通して表現技術もより高度なものを会得したであろうから、上巻に継続して執筆せんとの意識のもとに記述素材の整理、メモ等はその日その日とまではいかなくとも、ある期間をまとめつつ継続して書き記されていったのであろう。このことは上巻に比しての中巻の詳細な記述、詠歌の減少に反比して叙述の激増、心情の生々しさなどによってわかる。しかし、ある期間の経過をまとめて記述したものが即日記ではなく、あくまで原日記的なものであり、後にこれを補筆綴合したと思われることについては先述したごとくである。中巻に散見する兼家に対する敬意表現は原日記的なものからすでにあったとは思えない。天禄二年六、七月を契機として、年末近く作者の対兼家観の転換が確定的になった時点、中巻と補筆綴合する折に無意識裡に叙述されたものと思われる。中巻における激昂にも似た感情の吐露とは全く裏腹な兼家に対する敬意表現は以上のごとき考察以外に説明は不可能かと思う。なお、この敬意表現に関してかって口頭発表した折、岡一男博士より上巻に敬意表現が散見しないのは、愛情に強く結ばれた夫婦間にあっては相手を対社会的に表現する場合には決して敬意表現しないものであって、兼家・道綱母夫婦間の愛情が緊密であった証拠であり、反対に中巻以降敬意表現が散見することは、両者の間が冷却しよそよそしい態度をとったことの一現象ではないかとの御示唆をいただいた。御慧眼に敬服するばかりであるが、その後熟考したものの、敬意表現の有無を成立論に援用せざるを得ない。その理由についてはここでは触れない。

ところで原日記的なものを補筆綴合して中巻をまとめて執筆したのはいつであったか。敬意表現と兼家に対する意識の転換との相関関係から、天禄二年六、七月後であることはまず確かである。中巻は下巻との関係において敬意表現の散見度という点では連続性があり、中・下巻六年間原日記を記録し続け、上巻との記述量のつりあいを考慮して前後三年ずつに分割し、擱筆の天延二年後になって補筆綴合したとも考えられもする。しかし、かかる執筆事情によって記述されたものだとすると、中・下巻は記述内容、記述者の情念などに連続性が認められねばならないが、中巻に漲る兼家への怨恨がましい口吻は巨視的には下巻に見ることができない。上・中巻の持つ兼家への熾烈な怨恨はほとんど消失している。仮に中・下巻の補筆綴合が、擱筆の年天延二年後に一括して行なわれたとすると、中巻天禄二年六、七月の鳴滝参籠までの苦悩に満ちた原日記が多く手もとにあろうとも、兼家に対する意識転換からすでに三年以上も経過した後であり、補筆綴合時に上巻の「かげろふのごとき」はかない我が身の上を記述するという主題とつりあいをとるためかなりの文芸的操作が行なわれたとしても、現に見る中巻に横溢する烈しい口吻はより緩和されたことであろう。だとすると中巻の補筆綴合は、意識転換のあった天禄二年六、七月から程遠くない時点、天禄二年八月以降年末までの間になされたものと思われる。天禄二年八月以降年末までの記事の粗筆さも一つの証になるのではなかろうか。

六

中巻、下巻をそれぞれ全体的に見ると、中巻の熾烈な感情表現は下巻に至ると全面的に後退するばかりではなく、記述の主対象者としての兼家とて影の薄いものになり、一見主題を喪失してしまったかの観がある。この点微視的にはどうであるかをみるべく、中・下巻に表われた日付け記述（何月何日と明確に記され日付は勿論、日付に代表されているがごとき年中行事なども含む）を表示するとA表のごとくである。

（A表）

巻	中巻			下巻		
年／月	安和二年	天禄元年	天禄二年	天禄三年	天延元年	天延二年
一	2	0	7	9	4	1
二	0	1	3	9	4	1
二（うるふ）	／	／	／	8	／	／
三	3	4	1	9	2	2
四	0	1	3	2	1	2
五	1	2	1	4	3	3
五（うるふ）	1	／	／	／	／	／
六	2	2	3	1	0	0
七	2	6	8	2	1	1
八	0	3	2	4	3	1
九	0	0	1	1	1	3
十	0	1	2	1	0	1
十一	1	3	1	1	0	1
十二	0	3	2	1	1	1
計	12	26	34	52	20	17

これを見るに、中巻の初年安和二年から年を追うごとに多くなり、最多年は下巻天禄三年になっている。日付け記述が多ければ多いだけに執筆意図に基ずいた備忘録、消息文の反古などのメモ類による原日記的な資料が比較的緻密に記録保存されたことを物語ることからして、中巻と下巻は画然と分割されるものではなく、先述のごとく中巻を総括した執筆が天禄二年八月以降年末までになされたと

すると、中巻に継続して下巻初年天禄三年に入っても原日記的なものを記録し続けたことを示している。

A表に関連して、中・下巻における即日的記述、例えば「今日」「昨日」という表現を摘出し表示するとB表のごとくである。

（B表）

巻	中巻			下巻		
年／月	安和二年	天禄元年	天禄二年	天禄三年	天延元年	天延二年
一	0	0	1	2	0	0
二	0	0	1	4	0	1
二（うるふ）	／	／	／	2	／	／
三	0	0	1	1	0	0
四	0	0	0	0	0	0
五	1	0	0	1	0	2
五（うるふ）	0	／	／	／	／	／
六	0	0	4	0	0	0
七	0	1	1	0	1	0
八	0	0	1	1	0	0
九	0	0	1	0	0	0
十	0	0	0	1	0	0
十一	0	0	1	0	0	0
十二	0	2	0	0	0	2
計	0	7	11	12	1	5

これらはあくまで即日的記述であって、その日その日に書き記したものとは断定できないが、ある期間をまとめては原日記的なものを記録し続けた、その記録時点で即日記述され、実際の執筆時に補筆綴合する折に、本文にそのまま移行したものでもあろうし、備忘録、消息文、贈答歌などに記された日付がもとになって、一括して執筆する折にあたかも即日に記述したごとき表現になったものもあり、A表の日付記述と密接な関係にあると思われる。B表を見るにA表と同様中巻内では年を追うごとに漸増し、最多年は下巻初年天禄三年になっている。A表・B表を見合わせて特に留意せねばならないのは、天禄三年が最多年になっているとはいうものの、数値が

多いのはほぼ前半部に集中しており、後半部になると急に減少している点である。これは中巻の執筆が終ってから、或いは執筆中において、中巻に継続して日記記述する意図があり、天禄三年以降も原日記的なものを記述し続けた痕跡と見做すことができよう。しかし、意識転換があってからほぼ一年、天禄三年後半部になるに及んで、対兼家観、ひいては作者の結婚生活観の変化は如何ともしがたく、上・中巻に一貫した「思ふやうにもあらぬ身の上」を書き日記するというモティーフを持続することもできなくなり、その結果原日記的なものを記録する姿勢も必然的に変わり、記録すること自体もかなり減退したことを示していると思われる。

ここで兼家に対する怨恨表現、恨み心がもとになって兼家の言動に感応しての行動表現などの頻度数を表示するとC表のごとくである。

（C表）

巻	中巻			下巻		
年／月	安和二年	天禄元年	天禄二年	天禄三年	天延元年	天延二年
一	1	0	10	3	0	2
二	0	0	3	5	1	1
二（うるふ）	／	／	／	2	／	／
三	0	0	1	2	0	0
四	0	2	5	0	0	0
五	0	2	2	0	0	0
五（うるふ）	1	／	／	／	／	／
六	0	10	(29)（註五）	0	0	0
七	0	5	8	1	0	1
八	0	4	0	2	1	1
九	0	0	2	1	1	0
十	1	2	0	0	0	1
十一		2	0	0	0	2
十二	0	3	4	0	0	1
計	3	30	64	16	3	9

これらは読者の主観により受け取り方に問題が生じ易く、表示した数値に客観性があるとは言えないが、本文に即しできるかぎり客観的に操作することに努めた故、さして不当性はないと思う。また摘出するにあたって、作者の寺社参詣・参籠における記述は対象外とした。その故は寺社への参詣・参籠は常の生活と違って、自然観照のうちに泪を流し、つくづくと思いに耽けっても、それは間接的には兼家をうとましく思う心情と関連はあるものの、特殊な状況下に生じた心理であるとみたからである。C表を見るにA・B表で見たと同様、中・下巻との間には断層はなく、下巻天禄三年のほぼ後半部から急に減退している。これは天禄二年八月以降年末までの間、意識転換は漸次確固たるものになっていったものの、中巻全体の記述に適合させるべく、比較的緻密な原日記を天禄三年前半部まで記録し続けたものが、下巻を一括補筆綴合する折にそのまま移行し、天禄三年後半部以降は兼家に対する怨恨を中核とした原日記を記録する意志が消失していったがため、当然本文記述の面にも、兼家に対する感情表現の頻度も極度に減少していったものであろう。

中巻に継続するものとして下巻を執筆することを意図して、原日記的なものを記録し続けたものの、意識転換は如何ともしがたく、天禄三年後半部以降原資料を記録していこうとの意欲が減退してしまったのであるなら、天禄三年前半までの原資料は深く筐底に埋れて、下巻は執筆される蓋然性が皆消したとも考えられるが、それをしも下巻を執筆させた要因はなんであったか。下巻の記述は兼忠女腹の養女の件、養女に対する遠度の懸想、それに道綱の大和だつ女、八橋女に対する懸想などが兼家にとって替っている。兼忠女腹の女を養女とすることにつき、作者はなんの懸念もなく話をすすめ実現の運びとなるが、兼家と兼忠女との関係は遥か昔日のこと、今は全く無関係とはいいながら、兼忠女は作者にとっていわばライバル、しかもその女は兼家の胤、これを養女とすることには通例ならばしばし躊躇されるところである。にもかかわらず進んで世話しようとの気持には、一つには「こどもあまたありときく」時姫を意識してのことであり、また一つには養女を手もとに置くことにより、兼家の関心を自分に向けさせておく好材料との意もあったことであろう。この養女に対する遠度の懸想とて、養女の未成熟さ、遠度との年令差などからして望ましいものでないことは百も承知しており、強く拒否することも決して不可能なことではないが、兼家の意向を盾にしているかの態度をとりながら、拒絶するわけでもなく、さりとて賛同することもなく半端な態度をとったのは、養女であってもこれを世話する親権者として、兼家の子であればあるだけに、兼家の妻妾としての立場を己れ自身に対しても、また対外的にも意識したものであると思われる。兼家の妻妾としての形ある唯一のもの、道綱について多くを記述するのはあまりにも当然のこと。このようにみてくると、下巻において養女、遠度、道綱の三者に記述を集中させた作者の意の根底には、天禄二年六、七月を契機として兼家の心中に作者自身妻妾として確たる位置を占めていることを知り、観念的には落着し安定はしたものの、目に見え手に触れ得る身近かなものとして、妻妾としての立場をより具体的に感じとろうとした気持が常にあったと思われる。またこれら三人事を記述するという行為を通して兼家の妻妾としての立場を意識上にはっきりと持続

させんとした自己慰籍的な要素も多分にあったといっていい。確かに下巻は兼家中心の記述態度は失なわれ、空閨の苦悶、煩悩を記述するという本日記の主題までも喪失したごとくに読まれがちであるが、天禄二年六、七月を契機として屈折したものに変形こそしているが、「人にもあらぬ身の上までかき日記」する主題は決して失なわれてはいない。

最後に下巻が一括して纒めあげられた時期の問題であるが、擱筆の年天延二年から程遠からぬ時期、最大限一年間、すなわち天延三年内になされたものとみてまず大過はなかろう。

註㈠、立教大学「日本文学」第十四号。「蜻蛉日記」上巻の成立について。

註㈡、中古文学会、昭和四十一年秋季。

註㈢、同㈠

註㈣、蜻蛉日記の執筆をめぐって――上巻の構成、表現の面より――『国文目白』第五号

註㈤この数値だけは、鳴滝参籠中、自然観照のみ除外して、兼家に直接に関係するものを加算してある。